開催地名	長野県長野市
開催日時	令和５年７月３日（月）　12：55 ～ 13：45
開催場所	戸隠中学校
語り部	大峪　やす子　（三重県紀宝町）
参加者	戸隠中学校生徒、職員　50 名
開催経緯	全国的にも長雨の影響による災害が多くなってきていることから、自分たちの住む地域の土砂災害の起こりうる場所や避難場所等を生徒に把握してほしいと願い、土砂災害における防災教育を始めた。災害にあった経験や、それを引き継ぐ語り部の方の話をお聞きすることで、災害が身近にあることを理解し、危機感をもって活動できると考え講演会を行うことにした。
内容	◆紀伊半島大水害からの記録と紀宝町津本地区自主防災会の発足 紀宝町津本地区は、和歌山県、奈良県および三重県を流れる新宮川水系の本流で一級河川を流れる熊野川や、熊野古道と言われる世界遺産や独特の川船、三反帆で有名な地域にある。 この地では、2011 年(平成 23 年) ８月 30 日紀伊半島大水害が発生した。奈良県、和歌山県、三重県の３県を中心とする驚異的な豪雨により、熊野川にかかる大橋も浸水状態となった。奈良県上北山での総降水量は、1814.5ｍｍにもなり、熊野川の水位は 18.7ｍを観測した。これは 1959 年の伊勢湾台風時の 16.4ｍを大幅に上回る過去最高記録である。紀宝町の雨量は、1000ｍを超え、熊野川上流にある５つのダムが放水をした為、相野谷川が氾濫した。 2011 年（平成 23 年）９月３日 17：20 頃、9.4ｍある輪中堤を超えて、住宅街の道路が浸水し始めた。午後８時頃、消防署や警察に救助の電話をかけても、つながらない。隣近所助け合って、高台の家に避難した人や、屋根に上って一晩を過ごした人もいた。電線に流木が引っ掛かり、道路の水が、なかなか引かず、２昼夜、この状態が続いた。 2011 年（平成 23 年）９月９日　野田内閣総理大臣（当時)、鈴木三重県知事が、津本地区の被災地視察に訪れた。そして紀宝町災害ボランティアセンターが開設され、大勢のボランティアの方が来てくれた。その後、全国各地の個人や団体等から、食料や日常品などの救援物資が届けられた。しかし、自宅で困難な避難生活を送った人達には、これらの救援物資が届かなかった。 津本地区の最終的な被害は、津本地区住民 118 世帯中、床上浸水：81 世帯、床下浸水：３世帯　死亡者：１名であった。 2011 年（平成 23 年）11 月　私達は、アンケートを配り、津本住民の意見をまとめた。

	これにより 2012 年（平成 24 年）津本地区自主防災会が発足した。 ◆ 防災訓練・タイムラインの制定 2012 年（平成 24 年）11 月 23 日に初めての防災訓練を行った。地震体験車、消防団による放水訓練、炊き出し訓練には、豚汁を作った。参加者は 102 名だった。 2012 年（平成 24 年）２月に東京大学大学院情報学環総合防災情報研究センター客員教授松尾　一郎様の指導により、紀宝町は、風水害を対象とした国内初のタイムラインを策定した。タイムラインとは、災害時に、『いつ、何を、誰が、するのか役割や対応行動を定めたもの』である。 2015 年（平成 27 年）７月台風 11 号が発生した。相野谷川が増水したタイミングで、タイムラインが発令され、津本住民 33 世帯、61 名が早めの避難をした。 2015 年（平成 27 年）８月に台風 11 号の振り返りを行い、タイムラインワークショップを開いた。『タイムラインの制定により地区住民は早めに非難が出来た』『要支援者には、自主防会長が一人々車で迎えに行った』などの話が上がった一方で、『避難所で、乳幼児を抱えたお母さんは、お乳を飲ます時、バスタオルを背中にかけて、飲ませていてプライバシーが守られていないと感じた。』『避難所に入りきれず、車中で過ごしていた。』『テレビが無いので、情報が入りにくかった。』『山水を引いているので台風時、水が出ない』などの反省点も挙げられた。 2015 年（平成 27 年）９月６日、10 月 17 日に行われる、小、中学生合同訓練に備えて、紀宝町津本地区自主防災会でも『避難所運営模擬訓練』を行った。津市南が丘自主防中村　保親様のご指導のもと 45 名が参加した。 この訓練を下に、2015 年（平成 27 年）10 月 17 日、子供支援ネットワークで、小・中学生、地区住民 198 名が、一体となって「避難所運営訓練」に取り組んだ。小学生も社会の一員として、炊き出し班に加わりハイゼックスで、ご飯を炊き、おにぎりを作った。中学生は、高齢者の世話や、三角巾、応急手当、搬送救急法実施を習得した。 2019 年（平成 31 年）１月 20 日『第１回防災チャレンジ大運動会』を実施し、子供から高齢者まで、67 名が参加し、楽しく防災活動に取り組んだ。 ◆コロナ感染症の中での災害対策 2020 年（令和２年）７月５日　松尾一郎紀宝町防災行政総合アドバイザーの指導による新型コロナ感染流行下の避難所開設・運営訓練を行った。職員が、マスク、ゴム手袋、フェイスガード、防護服を着用し、発熱専用スペース、発熱者専用トイレを設置した。保健師が、受付で、問診表を記入し、避難スペースの場所を指定し、状況を適宜対策本

	部へ報告するなど、コロナ禍での特別な対応の訓練を行った。 ◆まとめ 紀伊半島大水害から 12 年経ち、あの年に生まれた子供は、中学生となっている。今では、水害を経験した人ですら、記憶から薄れて行く。私達に今できることは、「いざ」というとき、経験から得た知識を呼び戻すことだ。家族の糸、地域の糸、それらを幾重にもつむぐことで、地域を守る太い絆が生まれる。防災は糸をつむぐ作業。「大切な命を守る」為継続して活動を行う事が重要だ。
開催地より	災害を経験した方の気持ちを聞けたことにより、生徒も自分に置き換えて考えることができたようである。また、災害の教訓を運動会の競技として伝えていることをお聞きし、楽しみながら防災を考えていくことに興味を持つことができたようであった。